

# 8

## オーガニックコットンの栽培で 分断された地域コミュニティを結び直す

Point > 取組のポイント

[ヒト]

**立場や違いを越え、  
住民の絆を結び直す**

[着眼点]

**コットン栽培を通じた  
交流の場づくり**

[連携・協働]

**商品開発の組合を  
結成、ボランティアも**

[持続性]

**商品販売による  
事業収入も軌道に**

Area > エリア

福島県いわき市

Player > 取組主体

NPO法人ザ・ピープル

Project > 取組の内容

オーガニックコットンの栽培、  
商品開発・販売

Profile > 人物

理事長  
吉田恵美子  
よしだ えみこ



震災後、いわき市にて災害支援に携わる。2012年4月、市内の農家や住民とオーガニックコットンの栽培を開始。2013年にいわきおてんとSUN企業組合を設立、代表理事に就任。オーガニックコットンを使った商品開発・販売も行っている。



上・いわき市内の一角に広がるオーガニックコットン農園。  
下・農園では、夏に可憐なコットンの花が咲く。

[ヒト]

**立** 場や違いを越え、  
住民の絆を結び直す

福島県の海沿いに位置するいわき市は、震災と原発事故に遭い、複雑な課題を抱えることになった。住民の放射線に対する不安に加え、農林水産物への風評被害も起きた。風評への懸念から農業をあきらめざるを得ない農家が増加し、元々あった農業従事者の高齢化や後継者不足にも拍車がかかった。

さらに、津波と原発事故の複数の被害に見舞われた影響で、地域コミュニティの分断という特殊な課題にも直面することになる。いわき市には、津波被害などを被った住民に加え、原発事故後に原発周辺地域からの避難を余儀なくされた住民が急増した。避難者の数は、2011年夏に約4万人に上ったという。

そうした事態に立ち上がったのが、NPO法人ザ・ピープルだ。ザ・ピープルは「住民主体のまちづくり」を目的に1990年に結成され、古着のリサイクル業をメインに活動してきた。震災発生直後から災害支援活動を開始し、2011年夏からはいわき市に住む被災者および原発事故による避難者の支援も行う。

設立当初からのメンバーでもある理事

長の吉田恵美子さんは、地域住民と津波被災者、そして原発避難者が突然共生せざるを得なかった地域で活動する中で、それぞれの思いがすれ違う場面を目の当たりにしたという。地域住民や津波被災者の中には「原発避難者には東京電力から多額の賠償金が支払われているのではないか」といった思いがあり、それに対して慣れない地域で避難生活を送る避難者が負い目を感じたりと、互いに疑心暗鬼が生じているように見えた。

吉田さんは、地域コミュニティが分断しかねない状況に心配を募らせる日々を送る中で、活動当初から目標としてきた「住民主体のまちづくり」を続ける手立てを模



農園で育てたオーガニックコットンを収穫する人たち。笑顔が広がる。

索していた。そんな折、吉田さんは水俣市の被害に遭った水俣市（熊本県）でコミュニティづくりを続ける人と出会った。

水俣市では、傷ついてしまったコミュニティの絆を結び直すことを「もやい直し」と呼んでいる。「いわき市でこれから必要なのは、人々のコミュニティを結び直すことだ」。吉田さんは、水俣市の「もやい直し」に課題解決のヒントを得た。そしてその後、「人と社会とのつながりを取り戻す」ことをテーマに、オーガニックコットンの栽培やそれを生かした商品開発などに

福島県いわき市で、オーガニックコットンの栽培を通じて農業の再生や地域コミュニティの結びつきを強めようという取り組みが広がっている。NPO法人ザ・ピープルが主導する「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」だ。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故によって傷ついた地域から、「誰も置き去りにしない」まちづくりを目指している。

取り組むことになる。

**[着眼点]**

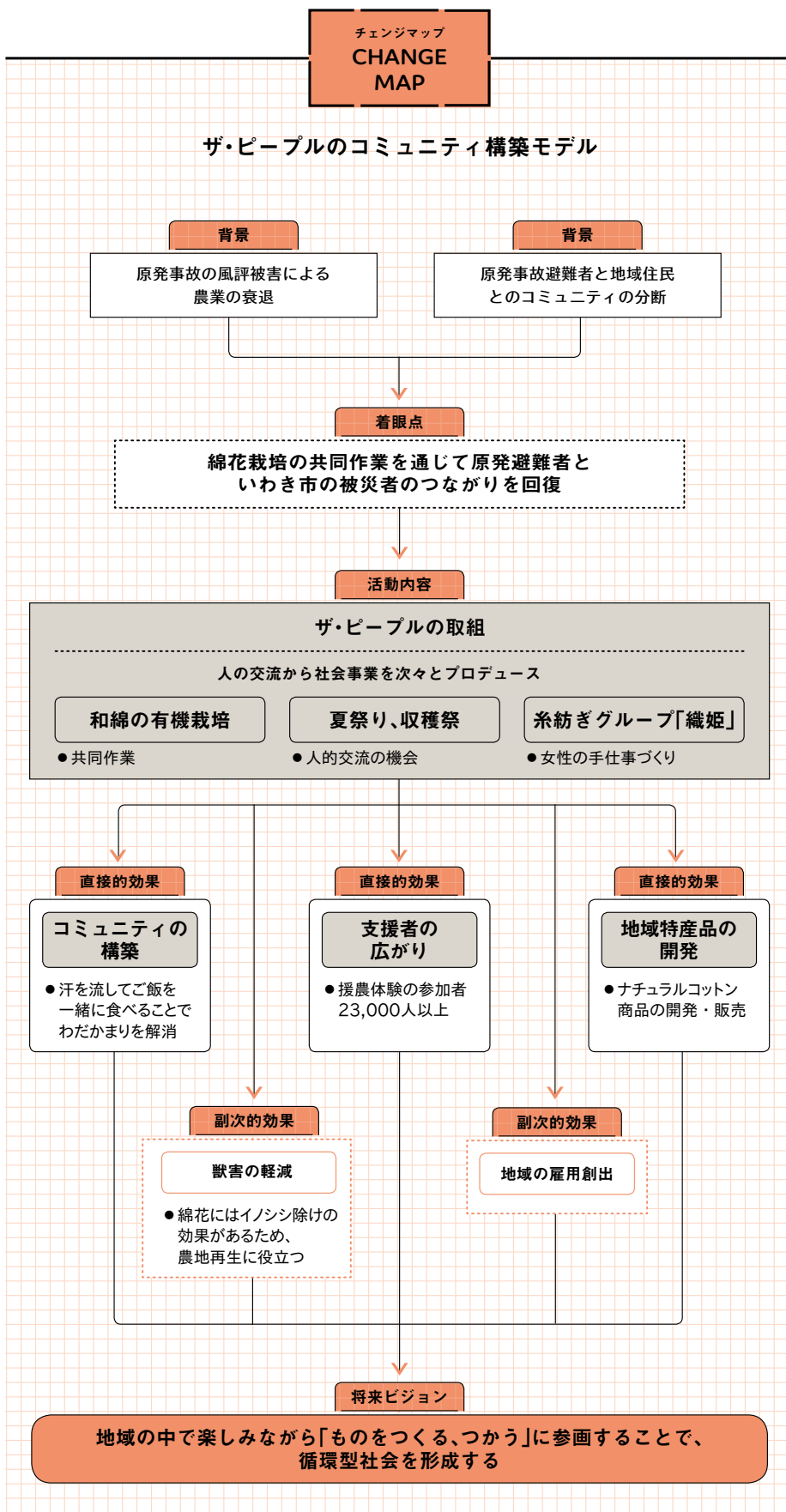
**コットン栽培を通じた交流の場づくり**

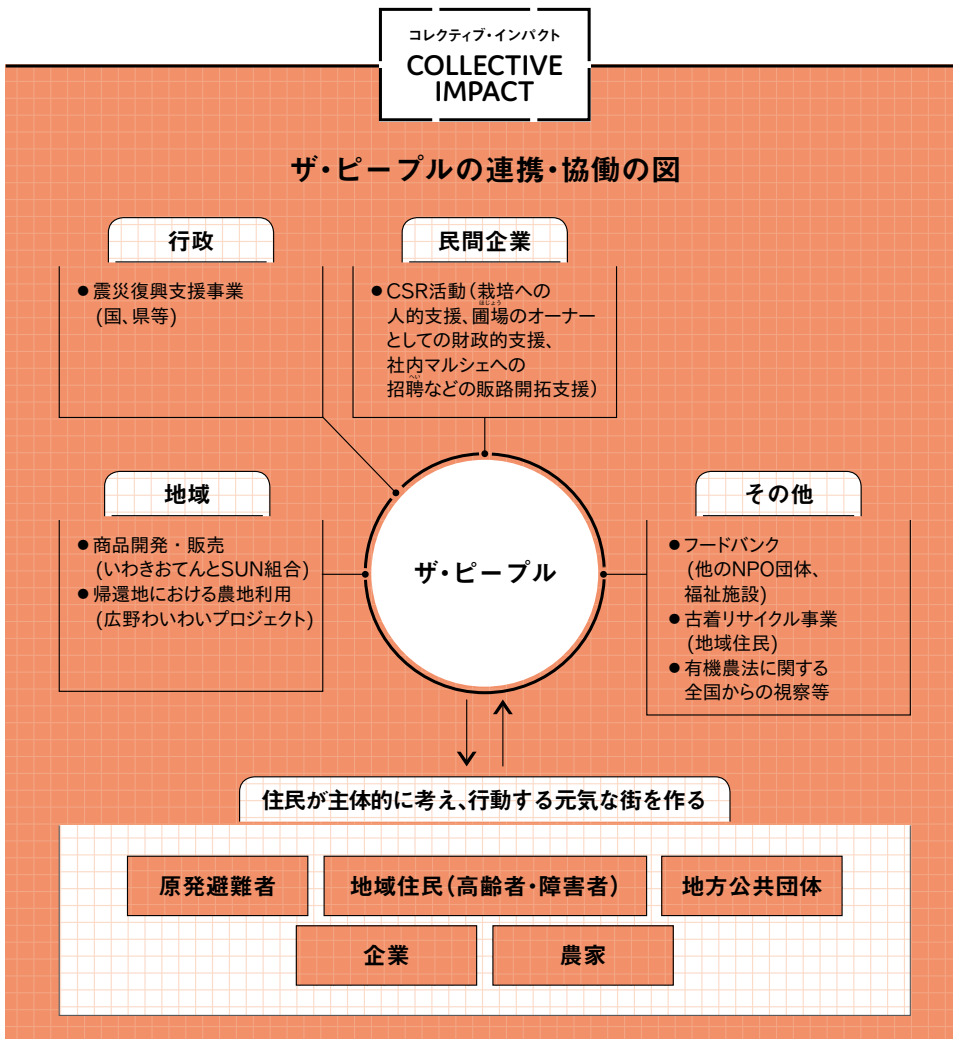
人々のコミュニティを結び直すため、具体的な方策を探りはじめた吉田さん。そんな中、また新たな出会いがあった。同じ津波被災地である宮城県亘理町で開催された、被災地の女性と東京の女性事業家などとの交流会に参加し、国産オーガニックコットン栽培の先駆けとして活躍する女性起業家と出会ったのだ。



コットンは、いわき市にも深刻な被害をもたらしているイノシシが嫌う性質を持つうえ、土壌からの放射性物質の移行が比較的少ないと言われている。温暖な気候を好むため国内では主に関西以西で栽培されているが、昔はいわき市内でもコットン栽培が行われていたという。

「食べ物ではなく衣類に使うコットンならば、放射線に不安を感じる人でも、安心して気軽に参加することができるかもしれない。コットンの栽培を通して、人々をつなぐ交流の場をつくれるのではないか」。吉





田さんはコットンにいわき市の「もやい直し」の道を見出し、「放射能汚染への不安」という負のイメージを持たれてしまった福島だからこそ、環境に配慮した有機農法を取り入れることを決めた。2012年4月、こうして「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」は動き出した。

「オーガニックコットンの栽培をしたい」。吉田さんが周囲に呼びかけたとき



秋、オーガニックコットンの収穫祭に集う地域の人たち。

ろ、いわき市内の農家を含む30人ほどの住民が賛同し集まった。コットンの品種は、「備中茶綿」という珍しい日本の在来種を選んだ。外来種よりも収穫量は見込めないが、日本在来種は原綿は1kgあたりの卸値が高くなるという目算があったからだ。収穫量は初年度こそ105kg(種付きの状態)にとどまったものの、翌年には890kgへと急増。栽培エリアも、いわき市内の小中学校・高校の計11校を含む26カ所に広がった。

さらに、原発周辺地域からいわき市内に避難していた参加者が、それぞれの故郷に帰還して現地でオーガニックコットンの栽培を始める動きも生まれた。広野町の町民らが取り組む「広野わいわいプロジェクト」をはじめ、楢葉町、富岡町、南相馬市、そして2018年からは今も避難指示が続く大熊町での試験栽培も始まっ

た。

このオーガニックコットンの栽培を通じて、地域住民たちが互いの立場を越えて語り合う場面も見られるようになった。当初は市街地で住民らが集まるサロンを定期的に開いてみたものの、どこかぎこちなく会話は弾みにくかったという。しかし、コットン農園での作業なら、互いに打ち解け合うケースが多いというのだ。「畑と一緒に泥だらけになって汗を流し、お腹がすいたらみんなでごはんを食べる。そういう場だからこそ、話せることはあると思う」(吉田さん)。互いの立場を越えて、コミュニティを結び直す。そうビジョンを掲げた吉田さんは、このプロジェクトの意義と効果に自信を得たと話す。

#### 【連携・協働】

## 商 品開発の組合を結成、ボランティアも

オーガニックコットンの栽培では地元の農家や住民らが参加していたが、それだけでなく、東京の企業によるCSR活動などとして、全国から延べ2万3000人以上もの援農体験者が協力するなど輪を広げてきた。さらに、その後も連携する団体は広がりを見せるようになる。

例えば、2013年2月に設立した、いわきおてんとSUN企業組合がある。ザ・ピープルは当時、国内での原綿の卸価格が想定外に低い現実に直面していた。ただ、地元農家は自分の畑もあるため、フルタイムで手伝ってもらうのは難しい。人手不足を補うために、新たにスタッフの採用と人件費を捻出する必要があった。そこで、事業を継続させるため、吉田さんたちはオーガニックコットンを使った商品開発と販売に乗り出すことを決める。しかし、商品企画や販路確保などの経験がないザ・ピープルだけで実現させるのは簡単ではなかった。

そこで、いわき市内の複数のNPO法人などと協働し、いわきおてんとSUNプロジェクトを新たに立ち上げ、その半年後にプロジェクトメンバーと有志ら6人で、営利事業を継続的に行える主体として、いわ

きおてんとSUN企業組合を設立。吉田さんは、代表理事に就任した。

「ザ・ピープルでは、オーガニックコットンの栽培を通して人々の交流の場をつくる。企業組合では、商品販売を通してその収益基盤をつくる。その両輪で、事業を進めていけたら」と吉田さん。現在は、自ら栽培したコットンに輸入分をミックスして、独特の色合いを持ち味としたTシャツやタオル、手ぬぐいなどを製品化して販売している。

製品化の過程でも、様々なプレーヤーと連携。紡績や製造は、富山県や「今治タオル」のブランドとして有名な愛媛県今治市など、全国でも高い技術力を誇る地域に依頼する一方、例えば手ぬぐいでは、福島県須賀川市にある染色技術の優れた工場に製造を委託しているほか、刺繍は地元いわき市の女性たちが行っている。

オーガニックコットンの栽培以外の分野でも、連携が生まれている。東北6県で連携し、生活困窮者に食料を提供するフードバンク事業だ。ザ・ピープルは、米や乾麺、缶詰などの食料を集めるとともに、その食料があることで、相談窓口困窮者が足を運びやすくなるような仕組みをつくり上げようとしている。

#### 【持続性】

## 商品販売による 事業収入も軌道に

いわきおてんとSUN企業組合を設立後、決して順調に商品の売り上げが伸びたわけではない。立ち上げ当初は、助成金や寄付金など外部支援に頼る部分も大きかった。それでも、ザ・ピープルと企業組合の両方で議論を重ね、商品開発のノウハウも少しずつ蓄積。2016年以降は、商品販売による事業収入も軌道に乗り始めた。

自分たちが栽培・収穫したコットンが商品化されることで、参加者に新たなやりがいが生まれる事例も出てきた。栽培したコットンを地元の女性たちが紡ぎ、手織りのポーチなどをつくる取り組みがその1

つだ。農業をはじめとする地域の産業が風評被害などの不安に苦しむ中、このオーガニックコットンのプロジェクトは新たな産業創出の可能性を秘めているといえそうだ。

このほかにも、畑ではいわき市内の公営住宅に住む避難者の男性が中心となり、「みんなの畑菜園」を始めた。参加者が希望する野菜を栽培し、収穫物を交流イベントなどで振る舞う料理の食材などとして活用する試みだ。トウモロコシやカボチャ、スイカ、枝豆などの農作物をつくり始めている。

地域住民やコミュニティをつなぐコットンの栽培と、それを持続的に回していくための商品販売。この両輪はがっちりとかみ合い、今力強く歩を進めている。

ザ・ピープルは2016年度、5年間に及ぶ活動を検証するために報告書を作成した。活動によって「置き去りにされて

いる被災者・避難者はいないだろうか」との思いで、住民などへのヒアリングを重ねた。その結果、「ここで新たな思いで出発しようと思った」などと前向きな回答が数多く寄せられた。一方で、活動を支援する人たちや運営スタッフからは、まだ接点を持っていない住民たちや、地元の関係機関ともっと連携を深めるべきとする意見もあったという。

「誰も置き去りにしない」。国連が2015年に定めた「持続可能な開発目標」(SDGs)で掲げた普遍的な目標を表す言葉だ。これは震災と原発事故後、住民と共にそれぞれの立場や違いを越えた地域コミュニティの結び直しを目指す、ザ・ピープルの目標とも重なる。「住民主体のまちづくりをしたい。その思いがあるからこれまで走って来られたし、これからもずっと走っていけると信じている」(吉田さん)

右・「ふくしま潮目」と名付けられた自社ブランド製品には、福島からの想いが込められている。  
下・自ら手がけたタオルと手ぬぐい。味わいのある質感やデザインが目を引く。



#### 本事例の問い合わせ先



NPO法人  
ザ・ピープル

所在地 > 〒971-8168  
福島県いわき市小名浜君ヶ塚町13-6

TEL > 0246-52-2511

HP > <https://npo-thepeople.com/>

主な事業内容 > 主な事業内容：オーガニックコットンの栽培、災害救援、古着リサイクル事業など